

「食べ物には誰かの思いやりで出来ている」

鳥取県 大廣寺副住職 宮川善永

私の妻の祖父母は、鳥取市の自然豊かな小さな集落に住んでいます。祖父は蜂の巣箱を備え付け、蜂蜜の収穫をしています。今日はこの蜂についてお話しします。

祖父が養蜂するのは、日本ミツバチです。日本で流通している蜂はほとんど西洋ミツバチで、日本ミツバチは西洋ミツバチの約0、1%です。希少な蜂蜜をいただき食べてみると、それは今までに食べた物とは比べ物にならないほど香りの良い美味しい蜂蜜でした。

祖父に「とても美味しかったよ」と伝えると、意外なことに、祖父の顔は少し曇っていました。「蜂は夏の間には蜜を蓄えて、冬は巣に籠もり、その蓄えた蜜で、寒さに耐え忍びながら子育てをする。だから人間が、秋に蜜を取ってしまったら、蜂は巣から追い出されて全滅になる。それが可哀そうだな」と言いました。私は、自分の視野の狭さにハッとさせられました。私は祖父の収穫する蜂蜜の希少さ、美味しさに感動しただけで、蜂の頑張り、その蜂から蜜を取る祖父の苦労や心労に気づかなかったのです。

私は夏場、その蜂の巣を近くで観察した事がありました。巣に鼻が触れそうなほどじっと見ている私を、蜂は律儀に避けて巣の入り口に降り立っていきます。足にはフツサリと花粉を持って帰ってくる蜂。身を粉にして頑張っている姿には、なんともいえない愛おしさを感じます。—自分が蜂なら、こんなに頑張れるだろうか—と私は頭の下がる思いでした。おいしくいただいた蜂蜜の一瓶に、蜂の努力や頑張りが詰まっているのです。

さて、曹洞宗で食事を頂く前にお唱えする「五観の偈」というお経に、次のような一節があります。「一つには、功の多少を計り彼の来処を量る」

これは、「目の前の食事には、どれほどの命がまつているのか、どれほどの功德がまつているのか、よくよく思いめぐらしなさい」という意味です。蜂一匹が一生をかけて集められる蜜は、スプーン一杯ほどと言われています。蜂蜜には蜂の命が詰まっており、それを頂いて私達は滋養を蓄えています。また同じように、他の食物にもそのような苦労が詰まっているのです。

手を合わせ「頂きます」と言う時には、目の前の食事の向こう側でどれだけの命が、そして作って下さる方の功德が詰まっているのかに思いを馳せてみてください。そして、この合わせた手のぬくもりは、そのおかげ様を持って生まれているのです。